

一人暮らしの最大の利点は、誰にも邪魔されず好きなだけ自分の身体を弄れること。

「うっ、あ、ああ~~~~~♡」

ぐぬ~~~~~♡

両足を大きく開いて腰を落とし、膝に肘を乗せる。押し返そうとする内壁を自ら押し込んでいき、先っぽがコツンと奥に当たった。ふーっと大きく息を吐いて、またゆっくり腰を上げていく。

ずるずる~~♡ぬぽっぬぽっ♡♡ぐちゅぐちゅぐちゅっ！♡

「あ、あ、あ、うう~~~~♡は、あ、お"おっ！♡あ、そこやばい♡あ、腰とまんな……♡」

床に固定したディルドの真上で情けなく尻を振る。自分の弱いところをあえて外したり、逆に押しつぶしたり。欲しい快感を求めては、目の前がチカチカ光る。

足つらい、気持ちいい、止まんない♡ここ、出っ張ってるところで擦ると……あー、きもちい♡もうちょい奥いけるかな。

「ああ~~~~奥すご♡♡んう、ん"おっ……♡ぎもちっ、きもちー♡んぐっ、あ！あああ……っ♡」

膝を開いてディルドの上に座り込んだ。より奥に深く飲み込み、一心不乱に腰を振る。

あは、ケツ弄って我慢汁飛ばしてるちんこ、情けね〜♡奥と前立腺シコシコすんの堪らない……やっぱこのディルドおっきくて長くて最高すぎ♡

勃起して揺れていたちんこを握り、好きな亀頭を捏ねる。きゅうっとナカが締まって更に肉壁がディルドに絡みつき、絶頂へ押し上げられていった。

目を閉じて快感を追い求めれば、パッとまぶたの裏に思い浮かぶ顔。本音が見えない綺麗な笑顔が、長い睫毛に隠れる色素の薄い瞳が、嘘くさい甘い言葉が。

「あっ、あ、だめ♡あっ、ひ♡イっちゃ、イク……あっ、あ"あああっ♡♡あ、ああ、ああ……♡♡」

どぶっ……♡とろとろお♡

最奥までディルドを飲み込み、だらしなく白濁を垂れ流した。ぼやーとした快感が全身を包んで、しばらくそれに浸りながらゆらゆら腰を回す。もういいか、とゆっくり引き抜けば、ぶるんっ♡とローションまみれのディルドが揺れた。

「……マジでいい買い物したわ♡きもちー♡」

まだ力が入らない脚をどうにか動かして洗面所へ向かった。流水でローションを落としながら、冷静な賢者タイムに突入する。

一人暮らしを始めてから、玩具は順調に増えた。最初は小さいものだったはずなのに、今では通販履歴を見返すだけで自分でも若干引く。

だってセックスって相手が必要だし、機嫌伺ったりめんどくさいし……相手に合わせてる間なんて、こっちは別に気持ちよくないし。だけど周りはやれ誰とやっただ抱きたいだ。別に自分からこんなオナニーしてる、なんて言うこともないから適当に話を合わすけど。

「やっぱ、手軽にすぐ気持ちよくなれる方が良くね？」

一人なら気を遣わなくていい。欲しいところも、止めるタイミングも、全部自分で決められる。ただ、たまに。自分で動かなくても誰かが全部やってくれて、ただ気持ちいいって言ったら褒めてもらえるなら、なんて思うことはある。

いや、ない。面倒くさい。そもそも男なら誰でもいいわけじゃないし、かなり俺面食いだし。タイプじゃない顔に褒められてもイけないわ。ふと、イく前に思い浮かべた顔を思い出し、ため息を吐く。

「顔はいいんだけどなー……顔は」

ディルドの水気を切ってその辺に立てかける。どうせ誰も来ないし、とそのまま服を脱いで浴室に入った。

「シャンパン入りましたー！」

「ありがとうございます！」

少し大きめに設定された BGM をかき消すように、ホストたちの声が響く。インカムから俺の名前が呼ばれ、裏へと回った。

生活費と学費の足しに、と高時給バイトを探した結果、ホストクラブのボーイに行きついた。顔の良い男を眺めて給料がもらえるなら、と始めたのはいいものの。

客の感情を上手く操るホストたち。

高額な酒。

シャンパンコール。

夢を見せるための営業スマイル。

そこにあるのは欲望と金と、甘い言葉の駆け引きばかりで。ずっとそれを見ているうちに、ホストという人種そのものが苦手になっていた。だがしかし、授業終わりから入れて時給もいい。仕事内容にも慣れたし、学費を考えれば簡単には手放せない。バックレるような度胸もなかった。

裏からシャンパンを持って卓に向かおうとしたとき、こっちだと手を振る姿が目に入る。足早にそちらへ向かえば、整った笑顔が俺より少し高い位置で迎えてくれた。

「ありがとお」

「今日、エース来てるんですね。売上凄いですよ」

「ほんと？楽しみー」

薄暗い照明でも分かる色素の薄い瞳を細めて、玲央さんは背中を向けた。まだ足取りはしっかりしてるけど、伝票を見る限りだいふ飲んでるはず。

「次、水持ってきますね」

「ええ？姫が飲めって言ったら飲まなきゃ」

「長い時間居てもらう方が、玲央さんの売上にもなるでしょう」

パッと振り返った玲央さんは、可笑しそうに肩を揺らした。

「そうだね、じゃあみーくんがこっそり持ってきて？」

「……だから湊ですってば」

「だからみーくんなんだってば」

長い睫毛が楽し気に瞬くのを見て、じんわりと勝手な罪悪感が胸に広がる。すみません、うちのナンバーワンで又きました。仕方ないだろ、こんなにカッコよくてタイプの顔なんだから！と、言い訳しているのを悟られないように、卓でシャンパンを開ける。

ソファーに座る客の手を握って、甘い言葉を囁いている玲央さんを見て卓を去る。やっぱり、苦手だ。桁を疑うような伝票、大金を使ってまで男に甘やかされたい姫たちと、それに完璧に応えるホスト。俺にはどっちの気持ちもよく分からない。時給と顔の良い男がいなきゃ、辞めてやるのに。

閉店の時間が近づき、清掃に入ろうとしたとき玲央さんが例のエース客を見送っていた。ボーイも近くにいたら後ろで見送ることが多く、玲央さんの少し後ろで頭を下げる。

「今日も楽しかったよ玲央くんっ！またすぐ会いにくるね！」

「俺も。楽しみにしてるね、すぐ連絡するから待ってて？」

開いたドアから温かい風が入り込んでくる。新生活が始まるこの季節、新たにホストにハマる人も多く今日は忙しかった。笑顔で手を振る玲央さんの後ろで頭を上げる。ニコニコと口角を上げている顔を横目に、小さく息を吐く。

「もう姫帰ったんで、その顔やめていいですよ」

「その顔って？」

「営業スマイル……いや、姫用の顔？疲れるでしょ、それ」

玲央さんは少し目を見張って、じとりとこちらを見やった。

「……みーくんってほんと、夢壊すよね」

「ホストに夢見てたらここで働いてないんで。客の前で言わないんだからいいでしょ」

玲央さんは数秒きょとんとしたあと、ふっと口角を落とした。肩まで少し下がって、やっと力が抜けたらしい。

「……確かに、今日は疲れたかも」

「でしょうね。水飲んでください」

「はいはい」

大学一年からこの店で働いている俺は、玲央さんがナンバーワンになる前から顔を合わせている。誰にでも気さくな人だから、今では雑談くらいなら普通にする仲だった。あー疲れた、マジで足いてえ。客がいらないのを良いことにプラプラと足を揺らしながら卓清掃へ戻る。

「みーくんもお疲れ」

「この店広すぎるんですよ。めっちゃ歩いた……この靴そろそろ買い替えないとなー。底すり減っちゃって」

「ふーん」

灰皿やグラスをまとめていく。机の下を覗き込んで忘れ物を確認したら、玲央さんの手入れされた革靴が目の前に。

「姫用の顔かぁ、じゃあみーくん用の顔はどんなの？」

「はい？そんなの無いでしょ……っ」

顔を上げると至近距離に、好きな顔のドアップ。グッと生唾を飲み、目が逸らせない。眉毛を上げた微笑みは普段より無邪気な印象で、甘い垂れ目が焦った俺を映している。さら……と光によっては白にも見える金髪が顔にかかって、ようやく我に返った。

「近い！！俺にまで営業かけないでください！今日アフターないんですか！？」

「あはは、ダメかー。そろそろ準備してくるわー」

ふらりとバックヤードに戻る玲央さんの背中が見えなくなり、ソファーに座って頭を抱えた。

「はー……勃つかと思った……」

それから二週間ほど経った、四月も終わりに近づいた頃。予定があって遅い時間からの出勤。ロッカールームで着替えて表に出ると、ボーイの先輩が慌ただしそうにしていた。

「おはようございます。今日忙しいですか」

「あ、おはよう。玲央さんがVIP 入ったんだけどさ、客が飲んで暴走してんだよ」

「うわー、それは大変ですね」

「前にも来てたわがままだと、玲央さん今どこいるか分かんないし」

「俺も探しときます」

助かるわ、と先輩はシャンパン片手にVIPルームの方へと消えて行った。ちらりと伝票を見れば、玲央さんにガチ恋気味の客。酒癖が悪く、酔うとわがままになるから店でも注意客として共有されている。

とにかく、うちのナンバーワンがいないと話にならない。

「佐伯出勤しました。玲央さんが見当たらないと聞いたので、巡回しつつ捜します」

任せる旨の返答をインカムから聞きつつ、ぐると店内を見渡す。先輩たちが仕事しながら見つけられてないということは、とバックヤードの方へと足を動かした。一つだけある従業員用のトイレ。開店中はほぼ使われないその扉は施錠されていた。ノックをしても、返事なし。

「玲央さん、います？」

「んあ〜〜〜〜？はい……」

「鍵だけ開けてください」

少し経ってカチリと鍵が開く音が聞こえた。ゆっくりドアを開ければ、そのまま座った玲央さんがなだれ込んでくる。

「ベロベロですね。吐けました？」

「吐いた、けど……ちょい休憩……」

「水持ってくるんで、椅子座りましょ」

真っ赤な顔の玲央さんを支えて、バックヤードの椅子に座らせる。整えられた眉毛は悩まし気に歪んで、気分が悪そうだ。酔っぱらっても顔がいい。まじまじと観察するのを悟られないよう、グラスに水を注いで渡す。

「はい、ちょっとでいいから飲んでください」

「んー、ちょっとでいいのお？」

「できればいっぱい飲んで」

「みーくん……飲ませて」

うっすら開いた重そうな臉が俺を捉えたらしい。惚けた笑顔と舌足らずな声でおねだりされ、変な声が出ないように唇を噛みしめた。なにこいつえっろ。思わず本音が出そうだった。

「……ストロー持ってきます」

賢明な判断だ。客用のストローを差して口元へ持っていけば、力なく水を飲み始める。もういない、と口を離した玲央さんはまた目を閉じた。

うちの店ではVIPには基本、担当のホストしかつかない。だからヘルプを入れて時間を稼ぐのが難しい。とりあえずインカムで玲央さんの発見と状況を報告すると、やはりできるだけ早く戻すよう指示が来た。

「玲央さん、戻れそうですか」

「大丈夫大丈夫。んー、あと3分粘らせて」

「……マークされてる客なの分かっててVIP入りましたね」

力の入らない首を傾けて、玲央さんは何も言わない。ただ静かに笑うだけだった。聞こえるようにため息を吐けば、息を漏らすように笑う。

「だって、可愛い姫だから」

立ち上がる玲央さんの背中へ腕を回す。ふらつく足取りも表へ出たらしくっかりしていき、俺も腕を外した。VIPルームへ戻ることをまたインカムで周知し、最奥にある扉を開ける。ふと見やった玲央さんの顔は、姫用の笑顔に変わっていた。

「ごめんね、ずっと待たせちゃって。寂しかったよね」
「もう遅い！！延長したからまだいっぱい飲もうね？」

ガラステーブルの上には何本もシャンパンの空き瓶が並んでいた。ラグジュアリーな空間を彩る豪華なシャンデリア。高そうな革張りのソファで客は玲央さんの腕を引き、自分の太ももへと招いた。ソファの後ろにある鏡に、ドン引きした俺の顔が映って表情を引き締める。

「あ、お酒追加。アルマンド1本とテキーラショット」
「まだ飲むの？姫、テキーラ苦手じゃなかった？」
「ん？ぜーんぶ玲央くんのだよ♡酔ってる玲央くん独り占めしたいの♡」
「……かしこまりました」

注文を終えると俺の存在は意識の外らしく、客は玲央さんの腕に絡みついて、肩に頭を預け上機嫌にシャンパンを口に運ぶ。

「ねえ玲央くん、今日アフターも絶対行こうね？私はホテルでもいいんだけどお」
「ご飯行きたいなあ俺。美味しいお店知ってるんだよね」

出て行くときに見た玲央さんはヘラヘラと笑いながらも酒が進んでいないようだった。

「どうしたもんか」

と、言っではみたものの、バイトのボーイにできることは情報共有と酒を運ぶことだけ。アルマンドとテキーラショットを手にもたてて部屋の扉を開いて、表情を固めた。あぶねーまた嫌な顔するところだった。

「ねえ玲央くん、今日は朝までずっと一緒ね？」

「ん〜、これ以上飲んだら朝まで一緒できないかも」

「だめ、ショットは飲むの！でもお、チューしてくれたら考えようかな〜♡」

客は玲央さんの膝に横向きで座りこみ、頬をベタベタと触っていた。なるべく空気に近い存在になるよう、気配を消して酒やグラスをテーブルに並べていく。早くこの生々しい空間から出て行きたい。ていうか玲央さんの綺麗な顔ベタベタ触るなよ。その長いネイルで傷つけたらどうすんだ。

「こちら、アルマンドです」

特に興味もないのかこちらを見もしない。別に見なくてもいいんだけど。ナプキンを使ってアルマンドの栓を抜く。その間に玲央さんがショットグラスを傾けた。さっき辛そうにしていたのを思い出し、心配になるが俺にはなにもできない。

2つのグラスに注げば、二人は乾杯をしてすぐに飲み干した。また注いでいく間にも、客の要求はエスカレートしていった。

「あ、玲央くんのお家でもいいよ。玲央くんの家行きたーい！」

「んー、家はダメだよ」

「なんで？全部ダメじゃん、なにそれ」

「うん、いつも本当にありがとう。こうやって可愛くして会いに来てくれて……。でもそれはまた別、ごめんね」

完璧な姫用スマイルが決まったな、と思いながら俺は立ち上がったが、どうやら姫には効かなかったらしい。客は低い声で、は？と唸ったかと思えば、膝の上から降りて立ち上がる。

「今日私、いくら使ったと思ってんの？今までもたくさんシャンパン入れてさあ？こんだけやって玲央くんは私に何もしてくんないじゃん！ほら、早く酒飲めよ！」

うわ、どうしたもんかなこれ。気配を消しつつ近くで待機する。VIP ルームで長居は基本 NG だが、昂った客は玲央さんしか見えていないらしい。

テキーラを押し付けられた玲央さんは、ゆるりと笑って一気に飲み干す。ショットグラスを机に戻す手が少し震えていて、限界が見て取れた。水を持ってこよう、と一度退室する。水の入ったグラスを2つ用意してまた VIP ルームへ入れば状況は悪化していた。

「私のお酒が飲めないってこと？！他の子の酒は飲むのに？」

「一回座ろ？ほら、お水でも飲んでさ」

ちらりところちらを見た玲央さんに頷き、テーブルへグラスを置く。しかし、客が引っ掛んだのはシャンパングラス。

「ナンバーワンだからってあんま調子のんな！」

あ、まずい。思ったときには身体が動いていた。数秒後に感じる、アルコールの匂い。アルマンドで濡れた服が気持ち悪くて、今度こそ顔を顰めた。

「ボーイが邪魔すんな！」

「お客様、申し訳ございませんが営業を妨害するような行為はおやめください」

「はあ？こんだけ金使ってやってんのに何言ってんだよ！そっちのホストが飲まないのが悪いんだろ！なに？あんたが飲むって言うわけ？」

パリン！

空になったグラスを床に叩きつけられる。更にガラステーブルが蹴飛ばされ、グラスは軒並み倒れていく。ここまでくれば、とインカムのスイッチを押し、叫ぶ客の声を共有する。

「この度、VIP ルームのご利用ありがとうございます。しかし……」
「うるせえな！ さっさと飲めよ！ ほら！」

これでVIP ルームが荒れてると伝わっただろう。ボトルを引っ掴んだ客をどう宥めようかと思っていれば、客は瓶を座っている玲央さんの口に押し付けた。

カッン、と歯が当たる音とともに、玲央さんの唇の端が切れて血が滲んだ。……は？ お前綺麗な顔に何してんだよ。傷つけてんじゃねーよ。それでも笑顔を絶やさない玲央さんにも、目の前の客にもイライラして、ボトルを客から奪い取った。

「なにすんのよ！ なに？ あんたが飲むわけ？」
「黒服に飲ませても売上になりませんから」
「じゃあこいつに飲ませるから返せよ！」

このまま返せば、また玲央さんの口に突っ込む。なら俺が飲んだ方が早い。4杯注いだからか、ボトルは少し軽い……残り半分もなさそうだ。

手を伸ばしてくる客を制し、アルマンドを瓶から一気に飲んでいく。うえ、炭酸の一气飲みキツ……でも高い酒は美味しい。そのままどんどん飲み進め、空になった瓶をテーブルへ置いた。

「これで、よろしいでしょうか」

まさか本当に瓶ごと飲むと思わなかったのか、客が呆気にとられている間にオーナーと他のボーイがルームへ入ってきた。グラスの破片が散らばり酒は盛大に撒き散らされている。酒まみれになった俺の有様も見て、オーナーは怖い顔で客を連れて行った。

あれは出禁になるかもな、とナプキンで濡れた服を拭く。どうせ支給されてる制服だし、何でもいいんだけど冷たい。

「相変わらず酒強いね」

「こういうときのため、じゃないんですけどね。あ、玲央さんソファから動かないでくださいね。めっちゃ割れてるんで」

インカムから、着替えてルームの片づけをするよう指示が来る。

「今日はVIP ルーム閉めますか？」

「閉店近いし閉めていいって。玲央さんも酔い冷ましに使っていいって、オーナーが」

「了解です、伝えます」

玲央さんに伝えれば、ほっとしたように肩の力を抜いてソファに身体を預けた。

「ごめんねえ、みーくん」

「別に。そんな高そうなスーツ汚されたら、クリーニング大変でしょ」

「あはは、やさしー……。あの子に悪いことしちゃったなあ」

あっちが一方的に悪いことしてたのでは？という顔をしてたのだろう。玲央さんは切れた唇を持ち上げた。

「だって俺は夢を見せたげる仕事なのに。夢から覚ましちゃったからさ」

瞳は長い睫毛に隠れて、何を思っているのか読み取れない。そのまま瞼を閉じると、玲央さんはほどなく寝息を立て始めた。だいふ限界だったんだろうな、と備え付けのブランケットをかける。

大金を払ってまで男に甘やかされる意味なんて分からないと思っていた。でも玲央さんにあんなふうに優しくされて、気にかけてもらえて、欲しい言葉をもらえるなら。……もっと欲しいと思う気持ちは、分からなくもない。

とりあえず着替えてこよう。インカムでガラス片の清掃だけ先に頼んで、俺はVIPルームを後にした。

着替えてVIPルームに戻れば、複数人のボーイが割れたグラスや濡れた床の掃除をしていた。その間も玲央さんはぐっすり眠っていたらしい。俺も清掃に加わり、大体の片づけが終わる。

「まだ破片残ってたりするかもしれないから、佐伯は締め作業終わったら玲央さん起こすついでに最終チェックしてほしい」
「分かりました」

閉店作業に入り、約1時間。そろそろ玲央さんも起きているだろう、と一人で清掃道具を持ってルームに入った。片づけられたガラステーブルに置いておいたグラスの水は減っていて、一度起きたことが伺える。

「玲央さーん、起きてます？」

「んん……はい……」

「体調どうですか？」

「吐き気はもう平気。頭もだいふはっきりしてる」

「俺の名前言えます？」

「佐伯湊。大学三年。ツンデレ」

「余計なこと言えるなら大丈夫そうですね」

無自覚にデレてたんだろうか。邪な考えがバレないように、仕事モードでいたつもりなんだけど。悟られないようにモップの水を絞って床を掃除する。

「もう店閉まったんで、まだゆっくりしてていいですよ」

「あの子、は？」

思わず手を止めて、ソファーに寝転がる玲央さんを見る。あそこまで暴れた客をまだ心配してるって、どんだけホスト向いてるんだよこの人。

「さあ、出禁になったんじゃないですかね。もう帰ってますけど」

「そっかあ……普段は悪い子じゃなかったんだけどな」

「問題がありましたよ。無理やり飲ませるし」

「一回おっぱい触らされたときはさすがにビビったけど」

「……」

鏡を見なくても、今自分が苦い顔をしているのが分かる。もう客もいないしいいか。表情を引き締めずに掃除を続ける。ふと顔を上げると鏡も酒が飛んで汚れていた。せっかくだし拭き上げるか。ソファーに片膝をついて、持ってきていたダスターとアルコールで拭いていく。

「玲央さん、鏡拭くんでちょっと起き上がってください」

「邪魔？」

「邪魔っす」

「あはは、頑張って」

退く気ないなこの人。わざとらしくため息を吐いて、玲央さんを乗り越えるように身を乗り出して鏡を拭く。バレないように玲央さんを盗み見る。寝て髪が乱れていてもかっこよくて、何ならちょっと可愛い。

あー、この人の事後ってこんな感じなんかな。ピロートーク上手そう。てかどんなセックスするんだろうなあ。今まで抱かれたやつ、羨ましー。

邪なことを考えながら手を動かしていたのが悪かったのか。

さわっ♡

「ひっ!？」

「あ」

今度はしっかり玲央さんを見る。持ち上げられた右手。その先には、俺の尻。

「は、え、なに……？」

「えー、可愛い反応」

「……仕事中なんで触らないでください」

変なこと考えてたから罰が当たった。からかわれたんだと思い離れようとすれば、ベストの裾を引かれる。

「酔っ払いに付き合わないですよ、俺は」

「みーくん、最近シてないの？」

「は？なにを……」

「じゃあ一人ではシてる？」

あんたの顔思い出して頻繁にオナってます、とは口が裂けても言えない。思わず黙ってしまうと、玲央さんは確信したようにゆくりと微笑み、身体を起こす。香色の瞳が甘くとろける錯覚を覚えた。

「あー、してるけど足りてない？若いなあ、欲求不満？」
「ちがっ！……セクハラですよ」

冷静を装おうと掴まれたベストを引いて手を剥がす。やばいその顔、絶対次シコるときに思い出す！とんでもないオカズの供給から逃げようと背中を向けると、今度は腰に腕が回ってソファに座らされた。

普段の玲央さんと、客の距離。今までで一番近い距離に、息をするのも忘れてしまう。たまに吸ってる煙草と、ウッディな香水。こんなに近くで感じたことが無くて、跳ねる心臓を落ち着けるよう息をするので精一杯だ。顔も見られない、ただ視線を泳がせる。

「何してほしい？」
「……何が」
「触ってほしい、とか」
「そんなこと」
「じゃあ離れる？」
「……」

腰に回った腕が緩む。今なら立てるのに、黙り込んでしまった。いやいやいや、そこは離れるところだろ！絶好のチャンスを逃し焦る思考が止まらない。

視界に長い指が映り、優しく顎を掬われた。シャンデリアの艶やかな光に照らされた玲央さんは、いつもこんな顔を客に向けているのか。そりゃ

金も払うし、甘えたいし、もっと欲しくなる。優しく垂れた目は全てを肯定してくれるように細められて、長い睫毛を揺らした。

ふ、と唇が重なる。え、俺キスされた？玲央さんに？顔に見惚れてたから避けられなかった。瞬きを繰り返す俺を見て、玲央さんは普段より低い声を響かせた。

「俺、みーくん抱けるわ」

「え？んんっ！？」

腰を抱き込まれ、さっきとは違う深いキスが呼吸を奪う。久しぶりの刺激は思考を溶かし、されるがままに舌を絡めた。ぬるま湯に浸かるような感覚で、侵入してきた玲央さんを受け入れる。うっすら目を開けると伏し目で俺を貪る顔。

まって、キス顔もかっこいいのヤバイ。てか、今なんて言った？抱く？誰が、誰を？

「んあ……ん……っ」

「みーくん、ちゅー好き？」

「は……、あんま茶化さないでください」

「こんな気持ちよさそうな顔してるのに？」

「してな……っ！？」

ぎゅっと抱き込まれる。さっきより玲央さんの匂いが近くて、反射的に大きく息を吸い込んだ。やば、匂いまでエロいこの人。吸わなきゃよかった。なんとか勃起しないように意識を向けていれば、インカムをしてない方の耳にリップ音が響く。

「ひぁ！？♡ちょ、れおさ……っ！」

「耳のほうが好きかあ、それでよくインカムできるね？」

「関係な……っ♡や、そんなボソボソ喋らないで……っ」

「あんまり耳責められたことない？反応しちゃうみーくん、かわいい」

言われたことのない褒め言葉に肩を揺らす。顔に熱が集まるのを感じる。刺激に耐えきれず身を振るたび、支えるように両腕が回る。

耳の輪郭を確かめるように、舌が這っていく。たまにふう♡と熱い息を吹き込まれ、あやすように柔い耳朶を犬歯で甘噛みされた。

「あっ！♡や、だめ、それ……っ♡」

「嫌なら、教えて？」

ふう〜〜〜♡ちゅっ、れろお♡つぼつぼ、ちゅぶ……♡

ぞわぞわと後頭部に鳥肌が立つような感覚。なんとか跳ねる腰を押さえつけようと、目の前のスーツを掴む。耐えを選んだ俺がお気に召したのか、尖らせた舌先がざりざりと耳孔を弄り始めた。ダイレクトに水音が吹き込まれる感覚に、善がる身体が抑えられない。

「れおさ、ん♡あ、やば、これえ♡」

「みーくん、きもちい？」

「き、もちい……♡」

言ってしまえば、認めてしまえば早かった。こしゅこしゅ♡耳の裏を撫でられて大きく腰を突き上げる。……あぶね、イくとこだった。なんとか下着を汚さず済んだ。

必死に息を整え、どう言い訳しようかぐるぐる考えていれば後頭部を優しく撫でられる。顔を見やれば優しく笑う玲央さんが、また触れるだけの

キスをした。情けない顔を見られる恥ずかしさより、好きな顔を間近で見られる誘惑が勝った。

「ちゃんと気持ちいいって教えてくれてありがとう。言えてえらいね」

「あ……♡」

「今度は何してほしい？どこ気持ちよくなりたい？」

「そんなの……っ」

「可愛いって言われたい？それともぎゅーってする？」

……あれ、ちょっとまで。ここの片づけは俺に任されてるから呼ばない限り、もう誰も入ってこない。俺が言い出さないと、ほんとに玲央さんに抱かれる！？

玲央さんがどんなセックスするのか気になる気持ちと、職場でそれはマズいとする理性が競り合う。黙り込んで焦っていれば、こつんと額を合わせられた。睫毛が触れそうな距離。柔らかく笑う瞳に吸い込まれそう。

「いい子のみーくんなら、教えてくれるよね？」

「ひ……♡し、した、が……♡」

「下？どこかなあ〜？」

「んあっ！♡ちがっ」

撫でていた後頭部からゆっくり手が滑っていき、首、肩甲骨、腰と降りていく。普段自分じゃ触らないところを撫でられ、大げさに感じてしまうのが恥ずかしい。ゆるゆる首を横に振れば、頬にキスをされ覗き込まれた。

「ほら、どこ気持ちよくしてほしいの？」

「う……♡ち、ちんこ……きもちよく、になりたい、です♡」

「よく言えました♡」

手早くベルトを外され、スラックスごと下着を下ろされる。ガチガチに勃起したちんこは、玲央さんに見られていると意識してだらだら我慢汁を垂れ流した。キャパオーバーで視界が滲み、玲央さんの手元まで追えない。

「これさっきの姫からもらったんだけど、試してみよっか」

「え？……は、え、オナホ？」

「そう。でも俺こういうの使わないから……」

言えない、数種類のオナホを使い分けてるなんて。封を切って箱から取り出し、付属品のローションを中に流し込んでいく玲央さん。非貫通式か、結構イボ多くて……締め付け良さそうだな。これレビュー高かったやつじゃないか？あの客、しっかりいいやつ選んでるのかよ。

「興味ある感じ？」

「あ、いやそうじゃなくて、その」

やばい、まじまじと箱に書いてあること読んじまった。慌てて箱を放れば、そっと肩を押されてソファの背もたれに体を預ける。

ひとりと先端にオナホを宛がわれ、息を詰めた。普段は自分のタイミングで始めるそれを、今は玲央さんに委ねられていた。いつ来るか分からない快感に、気持ちが急いて腰を突き出す。

「みーくん」

「はい、んん……♡ん、あ、あああ~~~~~！？♡♡」

ずりゅんっ♡♡

一瞬キスに気を取られている間に、一気に奥までオナホに埋め込まれる。鈴口が一番奥の吸い付きにタッチして、顎を上げて汚い声を漏らした。息を整える間もなく、ゆっくりオナホを引き抜かれて、また一気に奥まで……♡

まって、俺最初はゆっくり焦らすようにしたくて♡徐々に奥まで深くして行って、それから……っ♡

そんなオナホの好みな使い方なんて言えるわけもなく、玲央さんの手に握られたオナホに翻弄されていく。

「あぁっ！♡はや、はやい♡ふーっ、ふーっ♡♡あ、ぎゅって、しな、でえ……♡」

「どんな感じなの？何が気持ちいい？」

「あ……途中で、きゅって締まるところ……ん♡あ、ヒダが多くて竿きもちよく、て」

「うん、あとは？」

「うう~~~~♡は、あと、裏筋が、ざりざり、してえ♡はっ、はっ、イイ、ですう♡♡」

なんでオナホレビューさせられてるんだ。羞恥で顔を玲央さんの方に向うと、髪や耳にキスが降ってくる。

「一回イク？上手にイける？」

「あっ、はい♡イける、ちゃんと、イけ……っ♡あ、んんっはげし……っ♡あ、だめっ、きちゃ♡♡」

イク前のせり上がりが来て、自分から腰を突き上げる。あとちょっと、もっと奥まで……あ、イけそ……♡

びゅっ！びゅ〜〜〜〜〜っ♡♡

いつもより長い射精感に、最後まで出し尽くそうとヘコヘコ腰が揺れる。いつものオナニーより気持ちよかった……。人に触られてこんなにきもちいの初めて……。もっと欲しい、もっと気持ちよくなりたい。

オナホを引き抜こうとする玲央さんの手を握る。玲央さんが惚けた俺を見て、ゆるく首を傾げた。夢みたいだな、なんてぼんやり考えて。夢なら何言ってもいいか、とか。

「みーくん、どうしたの？」

「もっと……触ってほしい、です」

「どこ？」

「あ……う、しろ」

靴を脱いでソファーに踵を引っかける。M字開脚のような体勢を自分からとって、求めるなんて。恥ずかしさで眉毛が下がるけど、目の前の綺麗な顔から快感を得ることにハマってしまった。もらえるもんはもらっておきたい。

「後ろでも気持ちよくなれるんだ、みーくん意外とえっちだったんだね」

「い、わないで、ください」

「可愛いねって意味。じゃあオナホは自分でできる？」

頷いて今度は自分の好きなようにオナホを動かす。コントロールできる快感に身を任せていれば、俺より細くて長い指がつぷり♡と差し込まれた。今、玲央さんの指が……。それだけでキュッとナカが締まる。

「柔らか……昨日も後ろ使った？」

「……おしえない」

昨日はエネマグラ突っ込んでました。

「これなら2本入るかなあ」

「んあっ♡あ、ふ……っ♡」

ナカを探る指を感じながら、ゆっくりオナホを抜いていく。今度はゆっくり押し込んで……♡そのとき、ぐりっと前立腺を押し込まれた。

「んあっ！？♡♡は、ああ♡」

「あ、みーくんの気持ちいいとこみーっけ」

「ああっ、きもち♡ふ、そこ、もっと♡♡」

「いいよ、もっとね」

「ああああああっ♡♡あ、やば、これすご……♡」

ナカから不規則に与えられる快感に思わずオナホを握り込む。制御できない快感に手元は狂って、どんどん射精を求めて動いてしまう。

でもそれじゃ、ナカ足りない……。もっと前立腺ぐ～っ♡て押し込んで、ぶるぶる刺激して。ゆっくり奥まで挿れて、当たったところゴンゴン♡突かないと、イケない♡奥と前立腺シコシコしたい♡♡

「あっ、れおさ、ん♡」

「なあに？みーくん」

「ほし……っ♡れおさんの、ほしいです♡♡」

「ええ～？どうしよっかな」

「れおさあん……っ♡」

腹の奥が切なくて、媚びたように縋る。体裁とか何も気にせず、目の前の雄を泣いて求めた。あー、もう俺客に何も言えないわ。

「じゃあ俺寝転がってるから、いつもみたいに自分でやってみて」
「え……？」

俺のナカから指を引き抜いた玲央さんは、そのまま躊躇なく自分のスラックスの前を寛げ、ぶるんっ♡と勃起あがったちんこを出した。

でっか……♡♡持ってるディルドより太くて長い♡♡ごくりと生唾を飲めば、玲央さんが笑った。

「おいで、みーくん」

玲央さんに跨り、騎乗位の体勢をとる。右手でちんこを秘部に宛がった。両足を大きく開いて腰を落とし、膝に肘を乗せる。押し返そうとする内壁を自ら押し込んでいき、先っぽがコツンと奥に当たった。ふーっと大きく息を吐いて、またゆっくり腰を上げていく。

ずるずる～～♡ぬぼっぬぼっ♡♡

「あ、あ、あ、うう～～～～♡は、あ、お"おっ！♡あ、そこやばい♡あ、むりい……♡」

だめだ、ディルドとは訳が違う。熱くてデカイちんこを飲み込んだ途端、ミチミチと広がるナカが悦んで吸い付いた。その圧迫感が頭にガツンと快感を伝えて、太ももがずっと震えてる。

あと、玲央さん使ってオナニーしてるシチュエーションが興奮しすぎて無理！！♡

「大丈夫？」

「は、できます……っ自分で……っ♡♡お"、あぁんっ♡♡」

うそ、ちんこってこんな気持ちよかったっけ？♡♡奥にゴリゴリ当て、前立腺潰しながらばちゅばちゅしたいのに♡♡これ以上気持ちよくなるのが怖くて動けない……♡

は、は、と短く息をしながら少し腰を浮かした俺を見て、玲央さんは余裕そうに喋りかけてくる。普段より低くて甘い、囁くような声。じんわり身体に染みこんで、ナカから蝕むような。

「ずっと我慢してたんでしょ？俺の挿れたくて」

「ちが……っ♡」

「無理しないで、俺に掴まって……動ける？」

「できな、い……うごけない♡」

「ふふ、泣いちゃうくらい気持ちいいの？」

震える内ももを撫でられて力が抜ける。踏ん張っていた脚の力が抜けて、重力に逆らえなくなった。

あ、やばい。

ばちゅんっ！♡びくびくびく！♡♡

「あ"あっ！！？~~~~~っ♡♡」

「んっ、中イキした？そこまでできるの？かわいい」

「は、はぁっ、あ、やば、からだへん……♡きもちよすぎて、どうにかなる♡」

「やめる？」

……やめる？こんな気持ちいいセックス、次いつ出会えるか分からない。それにドタイプの顔に抱かれるなんて、もう一生無いかもしれないのに。

「やだ、もっと、もっときもちよくして？♡おねがい、れおさん……っ♡」

「もちろん、俺が手伝ってあげる」

ばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅっ！♡ごりごり~~~~
~~~~っ♡

「は、あぁっ、あ"、あ"、ん"んんんんっ！♡は、だめだめだめっ、そこばかり♡お、お"おっ♡」

「自分でできるって言ってたくせに、人にしてもらう方が嬉しいそう」

「できるっ、ほんとにはできるんだもん♡♡」

「じゃあなんでできなかったのかな〜？」

容赦ない腰振りが襲い掛かり、全身が快感に悦んでいる。散々甘やかされた身体は何をされても感じるほどどろどろにとろけていて、普段ならとっくに満足して終わってるのに。その先を引き出されようとしているのが、恥ずかしくて、気持ちよくて。

「ドタイプな顔と、えっちできて♡くっそ興奮して、きもちよすぎて無理だったの……♡♡」

「……なにそれ」

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅ！♡♡

ぐっと腰を掴まれ、激しく突き上げられる。うそ、玲央さんってこんな  
激しいセックスするんだ……♡奥ぐりぐり～ってしたあと、カリで前立腺  
ポコポコに潰されんのきもちいい♡セックス、きもちいい♡♡

「らめ、これ♡どうにかなる♡えっち、好きになっちゃ……あ♡♡お、  
お"、お"お～～～～♡」

「我慢しないで、いっぱい気持ちよくなって？」

「きもちいい、きもちいい♡♡あぁっ、や、れおさ……♡ちゅーしたい、  
ちゅーして♡♡」

「かわいい、いいよ」

上体を倒して自ら唇を重ねにいく。ナカの角度が変わって跳ねる腰を優  
しく撫でてくれた。喘ぎ声を飲み込むような深いキスが気持ちよくて、ぎ  
ゅ～♡とナカを締める。

一人でするのが楽だと思ってたのに。気持ちいいって言えば褒められ  
て、欲しいって言えばもっとくれる。動けなくなったら代わりに気持ちよ  
くしてくれる。

こんなの、一人じゃできない♡♡

「中出して、ほしい♡れおさんのほしい♡んう、んん、ふ♡あ、またイき  
そ、イクイク……っ♡♡」

「一緒にイこ♡俺もイきそ……」

「あ～～～～♡♡さいこう……っ♡あ、ああ♡ん"ん～～～～  
～～～～！♡♡」

びゅるるるっ！♡♡どろお……♡

だらしなく白濁を垂れ流し、射精感が全身を巡る。ぼや一とした快感が全身を包んで、しばらくそれに浸りながらゆらゆら腰を回す。もういいか、とゆっくり引き抜けば、ディルド……ではなく精液に濡れた玲央さんのちんこ。

あれ、俺もしかしてだいぶやらかしたんじゃない……。サーっと熱が引いて身体を起こそうとするのを、咎めるように腕に閉じ込められた。

「どこ行くつもり？」

「あ、玲央さ……俺……っ」

「いっぱい気持ちよくなれた？」

いやそれはもう、夢心地でしたけども。そんな素直に言うわけにもいかず、小さく頷く。すれば、頬を包み込まれてまた優しくキスを落とされる。

やばい、賢者タイムでこの顔にキスされるの耐えられない。触れられた頬からじわじわ首まで熱くなる。そんな俺を知ってか知らずか、玲央さんはまた綺麗に、それでいて楽しそうに笑った。

「みーくん甘やかすの、ハマっちゃいそう♡」

「……はあ？」

## 【このあとの展開予定】

玲央に欲求不満を見抜かれ、「一人ですの方が楽」だったはずなのに、甘やかされながら抱かれる気持ちよさを知ってしまった湊。

一夜限りの出来事だと思っていたのに――。

あの日を境に、玲央からの“特別扱い”はどんどんエスカレートしていく。  
夜食、送迎、高価なプレゼント。

最初は全部「ホストだから慣れてるだけ」「俺にまで営業しなくていい」と受け流していたはずなのに。

- ・深夜の高級寿司から始まる、No.1 ホストのガチ恋貢ぎ生活
- ・仕事中まで増えていく露骨な特別扱い
- ・他のホストの卓についた湊に穏やかな No.1 の嫉妬がついに露わに
- ・玲央が姫とキスしているところを目撃し、初めて嫉妬を知る湊
- ・結ばれた後は、目の前で自慰を見られながら「可愛い」「好き」「上手」とたっぷり褒められるあまあま濃厚えっち♡
- ・ずっと一人で楽しんでいた湊が、玲央にだけ素直に甘えるように♡
- ・最後は一緒に住む部屋まで提示されて「永久指名」ハッピーエンド

続きが気になる方は、ぜひお気に入り登録してお待ちいただけると嬉しいです。

お気に入り登録していただくと、発売時に通知が届きます！